

普及活動に役立つ研修の実施

本ミニシリーズでは、シリア技術協力プロジェクトと野菜栽培技術研修の事例を通して、研修をより有意義なものにするための、研修とその後の普及活動をつなぐ様々な仕組みや工夫を紹介してきた。3回目の今回は、普及活動に役立つ研修を目的としたワークショップの成果として、野菜栽培技術研修におけるフィールドデイについて紹介する。

野菜栽培技術研修のフィールドデイは、日本の野菜栽培技術をより正確に理解するため、野菜の特徴から適用した技術の要点や実験での結果を栽培圃場で発表し合うプログラムである。このプログラムでは、実験の意図を容易に理解できる必要な内容を的確かつ効果的に伝達することをもう一つの目的としているが、個々の研修員の発表は、研修当初に立てた栽培計画と結果の棒読みにとどまっており、研修指導側はプログラムが十分に出来ていないと感じている。そこで、このフィールドデイを普及活動の演習と位置付け、有意義な研修となるよう試みた。

はじめに、「ある地域の中央試験場で普及に移せる栽培技術が確立され、この技術を各地の普及所を通じて広めるため技術普及会議を開催する」という仮想の場面設定を行い、会議では、試験場の普及担当が各地の普及員に技術の有意性や、最終裨益者の農民に普及する時の要点などについて説明し、参加者が具体的な普及の方法について検討することとした。このなかで、「スイカの整枝栽培技術とバレイショ栽培における栽植密度の決め方について」を具体的な事例とし、試験場の普及担当として、どのような伝達手法を採用するか、発表に使う物の準備やリハーサルについてどの様に進めるかを研修員に議論してもらい、具体的な作業を行うことにした。演習では、研修指導側が研修員に仮想の場面設定についての説明を行ってから、研修員を2グループに分け、それぞれのグループにおいて具体策の検討と発表を行った。各グループのファシリテーターは、研修指導員が担当した。

また、プログラムの支援として、研修初期の4月に野菜栽培における灌漑技術とその普及の講義の中で、シリアに

おける「目標達成型研修普及方式」を紹介した。ここでは、農家のニーズに基づいて目標を定め、計画を立て、入念な打ち合わせや準備を経て実施に移すことや、参加した農家の理解度評価等を含む一連のフローとフィードバックの重要性について説明した。また、栽培実習では、取りあげた技術の特徴をスイカおよびバレイショの生育と共に説明し、収穫までに行った各種調査結果を検討した。更にプログラムの課題説明後、プレゼンテーション手法の講義を行い、情報の内容を的確・効果的に伝達する手法を紹介した。

次に、研修員全員での話し合いを行い、8月初旬に仮想の技術普及会議の演習を行う計画を伝え、対応するイベントについての各国の現状を紹介してもらい、準備作業のヒントを探った。話し合いでは、セントビンセントの研修員からは、デモンストレーションの評価シートを作成し、事後の活動に反映することや、作業の漏れを防ぐためのチェックシート作成などを活動計画に組み込みながらフィールドデイを開催し、技術の普及活動を行っていることが報告された。また、ラオス、ミャンマーの研修員からは、技術の特徴を整理した文書や写真資料を準備し普及活動を行っている旨の報告があった。フィジーの研修員からは、はじめに室内か日陰でポスターや図表を用いて普及技術の説明を行い、圃場でその実際を見せ理解を深めさせていることが報告された。さらにネパールの研修員からは、FFSの手法を実践していることが報告された。また、参加した農民をリラックスさせるための地域の飲み物を用意することや、質疑応答の手法を用いること、または2つの対比で普及技術の有意性を伝えることなどが紹介された。これらの現状のうち、セントビンセントの活動内容は、今回のプログラムに必要な要素を多く含んでいると思われ、詳細を研修員に説明してもらうことで、参加者全員でそれらを共有した。

2回目の会議は、グループ毎に行い、仮想技術普及会議での発表内容と順番、手持ち資料などについて検討し、発表のための材料作りにとりかかった。具体的には、参加者の特徴に応じた分かりやすい図表・写真を用いたポスターの作成、結果を実物でみせるサンプル野菜の収集や、発表後に記入させる評価シート作りなどであった。その後3回目のグループ会議を行い、演習日の準備を進めた。

これまでの指導を通じて、フィールドデイを普及活動に役立つプログラムにするためには互いの知識や知恵を披露する今回のような試みが有効であると感じた。



準備会議



会議資料作り